

譯

纂

Calmette 死後ノ B.C.G. 結核豫防接種

(La vaccination. antituberculeuse Par le B. C. G. depnis mort de calmette)

之ハ Vallery-Radot, A. ersin 氏等ニ依ツテ集メラレ昨 1939 年發刊セラレタ Albert calmette sa vie son oeuvre scinetifique, chapitre 1X ニ載セラレタモノヲ此所ニ摘録シタノデアル。

北里研究所 桑 原 く め

B.C.G. ノ無害ナ事ハ Calmette 及彼ノ協力者ノ實驗ニヨリ既ニ識者間ニ認メラレテキル。「ツベルクリン」或ハコッホ氏桿菌ノ「アセトン」浸出物等ニ因リ或ハ他ノ化學的操作ニヨツテ B.C.G. ノ毒性ヲ恢復サセヨウトシテ試ミラレタ總テノ實驗ハ失敗ニ歸シ又臨牀家ノ所謂 B.C.G. ガ人間ノ器官内ニ長ク滯留スル事ニヨツテ其ノ毒性ヲ恢復スルデアラフトイフ考ハ吾々ハ全然考慮スル必要ガナイ。又 B.C.G. ナ積ノ臓器ノ結節部又ハ「ワクチン」ヲ接種シタ小兒ヨリ得タモノハ常ニ無毒デアル。ノミナラズ實驗用動物ノ體內通過ニヨツテモ毒カヲ證明スル事ハ不可能デアル。

然シ臨牀家ヤ實驗家が時トシテ B.C.G. ノ毒性ノ恢復ヲ問題トスルガ彼等ノ主張ハ正シクハナイ。

Calmette ノ死以來「パスツール」研究所ニテ prof. Marfan 氏ヲ長トスル「Commission du B.C.G.」ガ設ケラレタハ會テ Calmette ガ長トシテ居ラレタ結核研究ノ爲ニ設ケラレタ處デアル。此研究所ニ於テ mm Beuzancon Debere, Lereboullet, Lesrie, Troisier, Weill-Halle, 氏等ガ委員トナツテ研究ガ繼續セラレタ。而シテ B.C.G. ノ毒性ニ關シ非難ヲ加ヘル臨牀家アルニモ拘ラズ現在迄ニ、B.C.G. ナ嚙下シタ小兒ニ害ガアツタト考ヘルベキ何ノ根據モナイ。生後直ニ B.C.G. ナ用ヒタニモ拘ラズ結核ニ

罹患シタトイフ例モ稀ニハアルガ之ハ B.C.G. ノ失敗トミル事モ出來ルガ又一方 B.C.G. ニヨル抗毒素ノ充分產生サレヌ内ニ彼等ノ兩親ノ内カラ感染シタモノトモミラレル。實際カ、ル状態ハ殆ト常ニ結核ノ環境ヲ意味シ且ツ少兒ノ感染ガ極初期ニ行ハレル事ヲ推論サセル。此ノ感染ハ牛類ノ間ニ就テモ證明セラル。故ニ「ワクチン」ヲ受ケタ小兒ガ其ノ最初カラ傳染性接觸カラ全ク隔離サレナイ限リハ避ケラレナイデアラウ。又 Commission du B.C.G. デハ常ニ B.C.G. 接種ヲ受ケタ小兒ヲ感染性接觸カラ全ク隔離シ、出來ルニ其ノ隔離期間ヲ長クシテ經口的ニ B.C.G. ナ嚙下セル後ノ免疫ニ要スル時間ヲ長クスル事ヲ主張シテキル。

B.C.G. 接種ノ動物ニ及ボス效果

(Efficacite de la vaccination Par le B. C. G)

研究室用動物ト猿ニ Calmette Guerm 氏ノ牛類ニ應用セラレタ方法ニヨリ豫防接種ヲ實驗シタ其結果即チ夫レノ效果ニ就テ愈々強ク心服サセラルルノデアル。B.C.G. ナ以テ海狸ノ結核豫防ヲ試ミタ學者ハ凡テ下ノ如ク報告シテキル。即チ生菌「ワクチン」ガ其體內ニ止ツテキル間ハ之等ノ動物ハ有毒感染ニ對シ著シイ抵抗ヲ示ス。

若シ Schlossmann Tzekhnowtzer, Kirchner, Schneider 氏等ガ尾長猿ニ就イテ Wilbert ノ業績ト同ジ結果ヲ得ナカツタシテモ Krans Gerlach Meyer Kuster Elkes 氏等ト同様ニ Stanley Griffith 氏等ハ之等ノ動物ノ皮下ニ「ワクチン」接種ヲ行フ事ニヨツテモ大ナリ小ナリノ結核ニ對スル抵抗ヲ示ストイフ事ヲ確メタ。

牛類ニ於イテハ Calmette, Guerin ノ指示ニ從ツテ行ツタ實驗ガアル。夫ハ結核ニ侵サレタ飼畜場ニ於テ仔獸ヲ生後 15 日目ニ B.C.G. 接種

ヲ行ヒ凡テノ隔離手段ト消毒ヲ行ハズ。其後毎年皮下注射ニヨリ 100 瓦ノ B.C.G. ヲ與ヘタルニ約 5 年間ニ結核病ヲ根絶シタトイフ。又豫防接種ノ結果ヲ利用スル爲ノ實驗ニ當ツテ「ワクチン」ヲ與ヘヨウトスル雌羊ヲ其出生ト共ニ結核ノ環境ニカヘストイフ事が必要デアル。又各國ニ於ケル何千ノ牛類ニ B.C.G. ヲ用ヒタ結果ガ其ノ無害ト效果ヲ明カニ示シテキルガ、臨牀家ノ多クハ人體ニ現レタ見地カラカ、ル結論ヲ下ス事ヲ拒絶シテキル。

人體ニ對シ「ワクチン」ヲ行フニ經口のニハ特別ノモノヲ用ヒ皮下注射ノ場合ハ牛類ニ用フル物ヨリ大分代ヲ經タモノヲ用フルトイフ事ハ眞實デアル。此ノ議論ハ免液ノ經口の方法ト非經口の方法ノ各々ノ價值ニ特ニ注意ヲ惹カセル。

嬰兒ノ經口の吸収法ニヨル B.C.G. 接種

Vaccination de L'enfant nouveaune Par le B.C.G.) 初生兒ノ經口の接種ニヨル豫防ニツキ Calmette ト彼ノ協力者ハ、他ノ著者ト同ジク腸粘膜ヲ通シテ行ハレルモノナル事ヲ證明シタガ、G. Pittaluga F. Garcia, Ciuca, Francke Vitner Rosenthal 氏等ハ出生直後ニ經口のニ接種ヲ行ツタ小兒ニ現レタ白血球ノ見地カラ血液中ニ現レルモノト組織學上ノ見地カラ内臓器官中ニ現レルモノトヲ説明シ S. R. Rosenthal ハ B.C.G. ヲ嚥下シタ若イ仔兒ノ「レ」線寫眞ヲ研究シテ Saye 氏ガ B.C.G. ニ歸セラルベシトイフ人體小兒ノ肺門淋巴腺ノ腫脹セル像ニ均シイモノヲ認メタ。又 B.C.G. ガ腸粘膜カラ吸収サレル事ノ推論ニハ Lübeck ニ於テ初生兒ニ B.C.G. ノ代リニ有毒ノ桿菌ヲ含ム 3 個ノ藥管(アンブレ)ヲ嚥下シタ事ニヨリ感染シタ事實ヲ證明シテキル。此ノ理論ニモ拘ラズ多クノ醫師ハ小兒ノ經口の接種ガ非經口の接種ニ於ケルヨリモ「ツベルクリン」ニ對スル反應ノ回數ガ少イトイフ理由ヲ以テ經口のニ與ヘラレタ B.C.G. ノ吸収ト效果ヲ疑ツテキル。Calmette 及ビ彼ノ協力者ハ「免疫性」ト「アレルギー」ハ Koch 氏桿菌トハ別種デアルト。而シテ「ツベルクリン」ニ對

スル過敏性ハ B.C.G. ニ因テモ惹起セラル。

夫レガ感染ニ對抗スルトイフ推論ガ下サレル。其所デ「アレルギー」反應ノ存在ト又一面ニハ免疫ノ生ジタ事ヲ示シタトモ言ヘル。

經口の接種ニヨル初生兒ノ「アレルギー」反應

(Les Reactions Allergiques chez les enfants Vaccines Par la voie Buccale)

之レニ就テハ多クノ學者ハ B.C.G. ガ吸収セシレタ結果トシテキル。Debre ト彼ノ協力者ハ結核ノ母親カラ生レタ幼兒ヲ直ニ隔離シテ「ツベルクリン」反應ヲミルニ陽性ニ現レタ。是ハ接種ニヨルモノト確信シタ。「ツベルクリン」反應陰性ナレバ 10 分ノ 1、10 分ノ 5 又ハ 1.0 珎ノ「ツベルクリン」ニテハ皮内反應ガ起ラヌノデアルガ實際ニ於テハ 97% 迄陽性デアル。此ノ「アレルギー」性反應ハ生後 3 ヶ月乃至 1 年時トシテハ 5 年モ續ク。Saye 氏等ハ皮内反應ヲ検査シ陰性ノモノニ B.C.G. ヲ接種シテ過敏性トナツタ事ヲ認メテ居ル。夫レハ Foley 及 Parrot 氏ノ成績ト同ジデアル。Chaussinand 氏ハ印度支那ニ於テ歐洲人ニ實驗サレタ。此ノ地ハ氣候ノ關係カラ結核ニ感染シタト認メラレタ者ハ直ニ隔離サレルノデ結核ハ極メテ稀デアル。B.C.G. ニ依ル「ツベルクリン」反應ハ弱陽性デ 18 ヶ月位持續シ接種者ノ陽性率ハ 50%。結核感染危險ノ多イ環境ニ住ム小兒ノ「ツベルクリン」ニ對スル感受性ハ豫防接種ニ因ツテ次第ニ減ジ 2—5 年デ全く消滅スル。

B.C.G. ヲ接種サセラレタ小兒又ハ結核ニ接觸シテキル學童ノ或ル者ハ感染シナイ。經口の接種ノ場合ニ於ケル「アレルギー」性反應陽性率ガ非經口の接種ノ場合ヨリ低ク且ツ弱イトハ云ヘ夫レニ基イテ發病ヲ防止シ得ナイトハ思ハレナイ。此ノ事實ハ出生時ニ B.C.G. ヲ嚥下シタ幼兒ノ間ノ可成高イ比例デ體內ニ菌ヲ留メテ居ル。夫レ故生菌「ワクチン」ガ免疫性ヲ發シ得ルヤウナ狀態ニアルトイフ事ガ斷言出來ル。

豫防ニ用ヒラレタ經口の接種ノ幼兒ニ及ボス結果

(Resultats de la vaccination des enfants Premunis Par la voie Buccale)

J. Querangal des Essarts 及 Mme de Carbonnieres de Saint-Brice 兩氏ハ 1193 名ノ乳兒ニ生後直ニ B.C.G. 接種ヲ行ヒタルニ其ノ死亡率ハ 7.3% デアル。夫レニ反シ接種ヲ受ケナイ乳兒 1084 名ノ死亡率ハ 17.7% デアル。更ニ兩氏ハ結核感染ノ危險ニ常ニサラサレテキル 262 家族デ接種ヲ受ケタ乳兒ト受ケナイ乳兒トヲ比較シ前者 366 名中其ノ死亡率ハ生後 7 年 10 ヶ月ニテ 11.2%、後者 468 名ノ乳兒中死亡率 23% A. Alger Ed Sergeant, H. Ducros, Rougebief, J. Birand 氏等ハ 4260 名ノ乳兒ノ内 2393 名ハ生後 10 日以内ニ B.C.G. 接種ヲ行ツタノデ死亡率ハ之ヲ行ハヌモノ、死亡率ノ 29% ヲ減少スル事ガ出来タ。J. Bandouin 氏ハ B. C.G. ノ經口の接種ヲ受ケタ 8452 名ノ乳兒ノ内死亡シタ者ハ 55.4% デ接種ヲ行ハヌ者ヨリ少イ事ハ大イニ喜ブベキデアルト云ツテキル。Bandouin 氏ノ觀察ト A. Frapper ト彼ノ協力者ノ實驗ハ北米ニ於ケル B.C.G. 接種ノ無害ト效力トヲ示スニ大イニ役立つ、Contacuzene ニヨツテ始メラレ彼ノ協力者ニヨツテ續ケラレタ「ルーマーマ」ニ於ケル結核豫防ノ接種ノ實驗ハ 448,014 名ノ乳兒ニ爲サレ其内 1,273 名ハ「ブカレスト」ノ結核領域中ニ住ンデキル。之等ノ人々ニ實施後 10 年間全ク其無害ナル事及死亡率ノ減少ヲ證明シタ。次ニアル統計ハ結核環境ニ住ミ B.C.G. 接種ヲ行ツタモノト行ハヌモノトノ比較デ其大部分ハ B.C.G. ニヨル免疫ノ出来ナイ最初ノ數週間ヲ隔離サレナカツタ者デモシモ此豫防ガナサレタナラバ結核ニヨル死亡ハ發表サレタモノヨリ減少シタ事デアラウ。何トナレバ此内ノ幾ラカハ確カニ B.C.G. ノ效果ノ未ダ現レナイ内ニ傳染シタニ違ヒナイ。

1926—1934 迄 Heynsius van den Berg 氏ハ「アムステルダム」デ 1500 名ノ乳兒ニ B.C.G. ヲ行ヒ内 215 名ハ生後 3 ヶ月結核領域内ニ生活シ

テキタ。此ノ 215 名中結核ニヨル死亡率ハ第 1 年ニ 2.3%、第 2 年ニ 2.5% ノ割合デアツタ。他方ノ乳兒ノ同ジ率ハ第 1 年 8.0%、第 2 年 18.0% デアツタ。Prokopowicz-Wierzbowska 氏ハ生後直ニ經口の接種ヲ行ヒ結核家族間ニ生活シテキル 276 名ト同様ノ條件下ニ生活シ接種ヲ受ケナイ乳兒 75 名ニ就テ觀察シタ結果ハ最初ノ 1 年間デハ結核死亡率ハ接種ヲ受ケタ者デハ 4% 然ラザル者デハ 14.6%、第 2 年デハ前者ハ 1.2%、後者デハ 5.6% デアツタ。

紐育デハ W. Park, C. Kereszturi ガ 269 名ノ接種ヲ行ツタ乳兒ト然ラザル 345 名ノ乳兒ニ就テ觀察シ、結核ニヨル死亡ハ接種ヲ受ケタ組ハ第 1 年ニ 1.6%、第 2 年目ニ 0%、受ケヌ組デハ第 1 年ニ 6.1%、第 2 年目ニ 2.4% デアツタ。「モンテビデオ」デハ Murguia Penco ガ 171 名ノ乳兒ノ B.C.G. ノ接種ヲ行ヒ皮膚反應ガ陽性ニナツタ時以外ハ結核ノ環境ニオカズ而シテ 171 名ノ幼兒ノ内 161 名ハ「ツベルクリン」皮内反應ハ陽性デアルガ健康デアル。此ノ中ニハ所謂彼等ノ重感染ヲ指示スル 9 名ガアル。夫レハ淋巴腺結核又ハ肺結核ノ徵候ヲ現シタガヤガテ治療シ唯 1 名死亡シタ (0.58%)。一方接種ヲ受ケヌ小兒 150 名ハ同様ノ條件下ニ同期間試験サレタガ結核ニヨル死亡ハ 9.8% デアツタ。「リオデジャネイロ」ノ Alvimar de Carvalho 氏ハ 38 家族ノ 101 名ノ乳兒中デ 1 例ハ結核菌ヲ證明シタ。48 名ハ生後直ニ B.C.G. 接種ヲウケ (經口的) 他ノ 53 名ハ之ヲ受ケズ。此ノ家族中 25 家族ハ小兒 2 名デアツタノデ 1 名ハ接種ヲ受ケ 1 名ハ受ケズ、其ノ年齡的關係モ年齡ノ多イ方ガ受ケル事モアリソノ反對ノ事モアル。被接種者ハ何レモ隔離サレズ。而シテ 8 ヶ年ヲ通ジテノ觀察ハ結核罹患率ハ接種ヲ受ケタ群ハ 20.8%、然ラザル群ハ 39.6% デ其死亡率ハ前者 2.1%、後者 13.2%、而シテ死亡者ノ 3 分ノ 2 ハ生後 1 年以内ニ發病シテキル。以上ノ結果ハ Calmette ト彼ノ協力者ガ既ニ發表シタ統計ヲ裏書スル。而シテ總テノ條件ガ同様ナラバ生後直ニ經口的、

ニ接種ヲ行フ事ニヨリ乳幼兒ノ結核ニヨル死亡率ヲ可成低下シ得ルモノト思ハレル。更ニ免疫ヲ得ル迄ノ期間中感染シ易イ状態カラ隔離シ得レバ效果ハ著シイ。

乳兒ニ於ケル經口の豫防接種ノ遠達成績

Resultats E'loiques de la vaccination des Eufants premunis par la voie buccale)

Lsaye B. Weill Halle ハ 1922—1927 年 バリニ於テ 10 歳乃至 15 歳ノ小兒 116 名ニ經口の B.C.G. ヲ施シテ然ラザルモノト對照比較シタ。之等ノ兒童ハバリカラ離レタ事ノナイ人達許リデ胸部ノ「レ」線像ヲモ併セ檢シタ。B.C.G. 接種ヲ受ケタ 35 名ノ小兒デ且ツ常ニ感染機會ニ惠マレタ状態ニアルモノデハ唯 1 名丈 (2.5%) 皮膚反應ガ陰性デアッタ。73 名ハ皮膚反應陰性デアッタガ第 2 回檢査ニ於テハ皮内反應 13.5% 陽性デアル。豫防接種ヲ受ケタ者ハ 1.8%、接種ヲ受ケザル者ハ 6.3% ニ結核性疾患ニ侵サレタ。其他多數ノ實驗カラシテ自然的感染ニ對シ抵抗力ヲ得ル事ハ B.C.G. ヲ接種スル事ニ依ツテ可能デアルト。

乳兒ノ非經口の豫防接種

(Vaccination des Enfants Par La Voie Parenterale)

多クノ學者ガ B.C.G. ヲ與ヘル方法トシテ消化器ヨリノ方法ヨリモ寧ロ非經口的方法ヲヨリ多ク用ヒル傾向ガ非常ニ多クナツテ來テキル。此ノ方法ハ經口的方法ヨリモ「アレルギー」反應ヲ起ス事ニヨリ短期間ニ良結果ガ得ラレルカラデアル。「バステール」研究所デハ脊部ノ 2 ケ所ニ 50 分ノ 1 疋ノ B.C.G. 皮下注射ヲ獎メテキル。(全體デ 25 分ノ 1 疋) 此ノ注射ノ後其ノ場所ニ 3—4 週ヲ經テ小結節ノ出現ヲミル。此ノ小結節ハ時ニ長ク殘ツテキル。此ノ B.C.G. 少量皮下注射ハ 7—8 週後ニ「アレルギー」反應ヲ起シガモシ起ラス時ハ更ニ短イ期間ヲオイテ注射ヲ施スノデアル。「アレルギー」反應ヲ早く起サセル爲ニハ B.C.G. ノヨリ大量ヲ同ジ方法デ用ヒル。即チ 16 分ノ 1、8 分ノ 1 疋ヲ用ヒルガ

此ノ量ハシバシバ注射個所ニ小結節ヲ生ジ且ツ化膿スル。尙 B.C.G. ヲ皮内ニ注射スル事ニヨリ「アレルギー」反應ハヨリ早く然シ局所反應ハ少イ。且ツ其注射量ハ 0.05—0.1 デ充分デアルト Weill-Halle 及 Saye 氏等ハ云ツテキル。又 C. Keresztuai 氏ハ 0.05—0.1 疋ノ B.C.G. ヲ皮内ニ注射シタル小兒 4—8 週ノ後ニ皮内反應陽性ニ轉ズト。

Wallgren 氏ハ B.C.G. ノ皮内接種量 0.5—1.0 疋ニテハ 1—3 週間ノ後ニ 0.25 疋ナレバ 4 週後ニ「アレルギー」反應ハ陽性ニ轉化スルト。皮内注射ニ於テハ注射部分ニ小結節ヲ生ジ或場合ニハ淋巴腺ノ炎症ヲ來シ時ニハ化膿スル、此ノ B.C.G. 接種ニヨル化膿ハ「アレルギー」反應ト密接ナ關係ヲ表ス。Saye 氏ニヨレバ小結節ノ大サト赤色化トハ「アレルギー」性皮膚反應ノ進行的出現ト一致スルトイフ。C. Kereszturi 氏ハ B.C.G. 接種ヲ受ケタ小兒ニ於テ淋巴腺結核ナキ人ハ 42%、淋巴腺結核ヲ有シ化膿ナキモノハ 83%、化膿セルモノハ 100% ノ皮内反應陽性ヲ見タ。

Chaussinard 氏モ此說ヲ主張シ氏ハ B.C.G. ヲ筋肉内ニ注射シタガ夫レハ皮下又ハ皮内注射ノ場合ニ比シ容易ニ膿瘍ヲ形成スル故現在ハ餘リ用ヒラレナイ。

紐育ニ於テ C. Kereszturi 及 William Park 氏等ハ 421 名ノ初生兒ニ非經口的ニ接種ヲ行ヒ又同ジ條件下ニオカレタ 421 名ノ經口の接種者ト共ニ 8 年間觀察セルニ、非經口的ニ與ヘタ者ノ結核死亡率ハ最初ノ 1 年 22%、第 2 年目ニ 0.9%、對照ノ經口の接種ノ死亡率ハ最初ノ 1 年ハ 8.7%、第 2 年ハ 2.5%、此ノ死亡率ノ減少ハ非經口的ニ接種ヲ受ケタ者ノ方ガ經口の接種者ヨリモ大デアル。B. Well-Halle 及 Bircwaig 氏ハ 71 名ノ初生兒ニ接種ヲ行ツタ。即チ 20 分ノ 1 及 25 分ノ 1 疋ノ B.C.G. ヲ生後 7 日及 11 日ニ皮下注射シタ。此ノ場合衰弱ナキ早生兒ニハ施行出來ルガ先天的衰弱アル者ニハ中止シタ方ガヨロシイ。何レモ局所及全身ノ副作用ハ

ミラレナカツタ。皮内注射ニヨツテモ同様ノ結果ヲ得ル事が出來ル。氏ハ結核ノ環境ニアル小兒ヲ出生ト同時ニ家族カラ隔離シテ收容シ B. C.G. ノ注射ヲ行ヒ「ツベルクリン」反應ガ陽性ノ間ハ家族トノ接觸ヲ許ス。隔離期間ハ6ヶ月—2ヶ年、接觸期間ハ4—72ヶ月デアル。而シテ結核家族ト接觸アリシ230名ノ小兒ノ内3分ノ1ヨリ稍々多クハ出生後直ニ注射ヲウケ他ノモノハ學齡ニ達シテ後注射ヲウケタ。夫等ノ小兒ハ何レモ1ヶ月毎ニ「レ」線検査ヲ行ヒ之ヲ1ヶ年施行シタ。此ノ230名ノ内明カニ結核性ノ肺門淋巴腺浸潤ヲ示シタ1名ハ其兄弟ニ肺結核ヲ證明シタ。内4例ハ肺門淋巴腺像影ガ正常ノ者ヨリ稍々廣ク7例デハ健康ト病的ノ決定ニ苦シム程度デアリ216名デハ全ク正常デアツタ。230名中2名ノ死亡者ヲ出シタガ之ハ結核死デハナイ。此ノ接種ノ效力ハ次ノ事實デ判斷サレル。B.C.G. ニヨル豫防ハ1927年紹介サレ1927年以前ノ5年間ヲ3期間ニ分ケテ兒童ノ結核ニヨル死亡率ヲミルニ4.3%、4.2%、3.4%デ1927年ニハ3.9%デアツタ。1928年以後結核豫防ノ主義ガ嚴重ニ應用サレタ結果小兒ノ結核ニヨル死亡率ノ減少トナツテ現レタ。即チ1.4%デ以前ヨリ約6.0%ノ減少デアル、1933年ニハ結核ニヨル小兒ノ死亡率ハ0.9%ニ過ギナイ。一方一般ノ結核ニヨル死亡率特ニ肺結核ニヨル死亡率ハ減少スル様子ハ見エナイ。即チ小兒ヘノ結核感染源ハ減少セザルニモ拘ラズ小兒ノ結核死亡率ノ減少ハ B.C.G. ニヨル豫防ノ效果ヲ物語ルモノデアル。

成人ノ非經口の豫防接種

(Vaccination des Adultes Par La voie Parenterale)
大人ニ關シテハ觀察ハ Heimpech 以來 Ulle-ral-osto 病院病室ノ看護婦ニヨツテナサレタ「ツベルクリン」反應陰性ノ人ハ、小兒ト同様結核ニ對

シテ非常ナ感受性ヲ持ツテ居ルト云フ事ヲ示ス。最近 E. Rist, P. Reyt R. Tuchila ノ觀察ニヨレバ大學—入學スル60名ノ皮膚反應陰性者中44名ハ研究中ニ陽性轉化シ内6名ハ臨牀的及「レ」線像ニテ結核ヲ證明スル。尙84名ノ皮膚反應陽性ノ大學入學生ハ何レモ結核ノ徵候ハナイ。此ノ事ニヨリ結核ノ環境ニアツテ B. C.G. ノ注射後尙「ツベルクリン」反應陰性ナル人々ヲ如何ニスベキカトイフ事ヲ指示サレルノデアル。

Heimbeck ハ Ulleval d'osto 病院ノ結核患者ヲ世話スル奉仕ノ所デ假入學見習中デアツタ學生等ニ20分ノ1延ノ B.C.G. ヲ皮下注射シタ。287名ノ注射後「アレルギー」反應ヲ起セル者ノ内8名(2.8%)ノ結核感染ヲ見他方注射ヲ受ケザル280名中デハ96名(34.3%)ノ感染者ヲ出シタ。Heimbeck ハ非經口ノ成人ニ與ヘル B.C.G. ハ「アレルギー」反應ヲ起ス限リ大ナル效力アル事ヲ實證シタ B.C.G. 注射後「アレルギー」反應ヲ起サナイ者ノ結核感染率ハ20.5%注射後引ツバイテ「ツベルクリン」反應陽性ノ者ノ内デハ僅カニ4.3%デアル。Scheel 氏ハ皮膚反應ハ陰性デアルガ B.C.G. ヲ注射シタ者ノ結核ノ罹患率ハ非注射者而モ皮膚反應陰性者ノ罹患率ノ半分以下デアル事ヲ認メテキル。

斯ク B.C.G. ハ結核豫防ニ對シ大ナル役割ヲ演ジ「ツベルクリン」反應陰性者ハコノ注射ニヨツテ陽性ニ轉化シ結核感染カラ救ハレル。結核療養所ニ働ク醫師、看護婦ハ特ニ B.C.G. ノ接種ガ必要デアル。今ヤ各國結核療養所ニ於テハ結核豫防ニ關スル免疫問題ガ實際化シヤウトシテキル。佛國及米國等デハ既ニ一部ニ於テノ使用ガ行ハレテキル。要スルニ B.C.G. ノ無害ナル事ハ確實デアリ其ノ效果ニ就テハ今後ノ事實ガヨク證明スルデアラウ。